

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2017年5月 NO.197



[もくじ]

- 2～3 続けていくこと…石見陽奈
- 4～5 高知県文化財団の取り組みをご紹介します…高知県文化財団
- 6～7 第27回高知出版学術賞を審査して…佐藤恵里
- 8～9 超巨大ブラックホールの起源に迫る!…泉拓磨
- 10～11 先達の想いをつなぐ高知市展—第69回展に寄せて—…下山郁夫
- 12～13 高知市文化振興事業団2～3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン:「ホタテ」小村夏生

公益財団法人高知市文化振興事業団

続けていくと

石見 陽奈

元々、絵を描くことは小さなころから大好きで、周りのみんなが外で遊んでいる中、一人ですっと部屋の中で絵を描いているような子供でした。漠然とこの先も美術に関わっていきたいと思うようになったのは、高校一年生ぐらいの頃からだったと思います。最初は下手くそな絵と立体物を組み合わせたようなよく分からない物を作って公募展に出品してみたりして、絵を描きたいというよりは、とにかくなんでもいいから表現する人になりたいと思っていました。

二十代前半、大学に通いはじめた頃は、もやもやと表現したい思いはたくさんあるのにそれをどうやって絵に表せば良いのか分からないままだがむしろに描いていました。誰もが経験することな

のだろうと思いますが、描いたものがどれもこれも中途半端に見え、描いては消し描いては消しの繰り返し。当時の絵は捨ててしまっほとんど残っていません。あの頃は自分の絵を好きになることが全く出来ませんでした。でも、とにかく描くことをやめてはいけな、周りの同級生よりもたくさん描かなければいけないという思いは強く持ち続けていました。

二十代後半になり、二〇一三年（二〇一五年の間は主に祖父母を描いていましたが、この頃は本当に苦しく、一つのテーマにずっと囚われ身動きが出来ないような状態でした。絵画は鑑賞者がいるからこそ成り立つもの。そのことを考える余裕が無く、個人的な感情でしか描けていないことも分かつ

ているのに、どうすればいいのか分かりませんでした。評価してくれる人もいたけれど、このままでは前に進めないと思い、二〇一五年一月に第十回美術作品コンクール Concours des Tableaux に祖母の絵を出品したのを最後に、次からは全く違うものを描こうと決意しました。



「past」2015年 117 × 234cm

今のような、主に墨を使って風景を描くようになったのはごく最近のことです。二〇一五年二月、

ちょうどConcours des Tableaux に祖母の絵を出品した一カ月後でしたが、職場である香美市立美術館で「日本画の楽しみー新しい表現への挑戦ー」という企画展を開催しました。日本画家として県内外で活躍をしている作家さんたちのグループ展だったので、学生時代に日本画の授業を受けたり日本の美術史を学んだりしたことがほとんど無かったからなのか、その時の私にとってはまだ日本画というジャンルはどこか遠いところにあるようなイメージでした。仕事をしている中でいちばん楽しい時間は作家さんのお宅にお邪魔して作品を見せていただく時なのですが、その時も展覧会に参加していただく総勢八名の作家さんのお宅にお邪魔し、制作場所も見せてもらいました。自分の作品の方向性に疑問を感じていたその頃の私は、いわゆる花鳥風月的なイメージを持ってしまいがちな「日本画」というジャンルにとらわれな生き生きとした皆さんの表現に刺激を受けました。とにかく今の状態から抜け出し新しいことをしたいと思っていた私は、なんとなくつつきにくいイメージを持っ

てしまっていた日本画材を触って
みたくなり、それを機に、描くモ
チーフも人物画ではなくいつそ今
まで描いたことのない風景画を描
いてみようと思ったのです。

美術館で働いていると、常に色
々な作家さんとの出会いがあり素
敵な作品に触れることができます。
館長一人、事務一人、非常勤学芸
員一人の計三人という少ない職員
体制で年五、六本の企画展を、ひ
とずつ三人で力を合わせて実現
していくので、毎日が目まぐるし
く過ぎていきます。ですが、その
分多くの作家さんと密に関わる事
ができますし、実際、あの苦しい
状況から一歩前へ進むことができ
たのもこの場所で働いていたから
こそ経験できたことでした。この
ような出会いの場で働かせていた
だいていることを、本当にありが
たく思っています。

もうひとつのきっかけとなった
のは、昨年の高知県立坂本龍馬記
念館での個展です。龍馬記念館の
「海の見える・ぎやらい」での
個展のお話をいただいたのは二〇
一五年の四月、ちょうど私が日本

画家の市川雅彦先生の教室に通い
始めた頃でした。個展の会期はそ
の次の年の二〇一六年夏。日本画
材を使い今まで描いたことのなか
った風景画を描いて展示をする計
画を立てました。個展に向けての
制作期間中は本当に手探りで、相
変わらずもやもやと悩みながらで
はありましたが、まるで絵を学び
始めたばかりのような新鮮な気持
ちで作品と向き合うことができ、
自分のこれからの方向性を探って
いく中で龍馬記念館での個展がち
ょうどあの時期にあったことは、
偶然ではなかったような気がして
います。そして、龍馬記念館での
個展が終わってすぐ、高知県展へ
出品するための作品を描いている
時、ふっと私の中で迷いが消えた
瞬間がありました。イメージがど
んどん浮かんできて描いている手
が止まらない。あんな感覚は初め
てでした。それから、とにかく
絵を描くことが楽しくてたまりま
せん。三十代になった今、私の中
にずっとあった枷のようなものが
突然取れたような不思議な感覚で、
とにかく前に進みたいと思ったあ
の時から今までの約二年間は本当
に実りの多い二年間でした。



「山の声を聴く」2016年 160×100cm

最近、これからも日本画を続け
ていくんですか？とよく聞かれ
ます。確かに日本画というジャン
ルに触れることが出来てから視野
が広がりました。でも、とにかく
ただ画面に筆を走らせていく行為
が幸せで仕方ない。結局ただそ
れだけのことのよう気がします。
今まで絵を描くことが苦しかった
時も、やめようとは一度も思いま
せんでした。これからも何度も苦
しんで迷うのだろうと思います。
また新しいことがしたくなり、全
く違う表現方法になる時が来るの
かもしれない。でも、絵を描く
ことが好きだという思いはきつと
一生変わらないのだろうと思いま

いしみ ひな

一九八六年高知県生まれ、在住
高知大学教育学部生涯教育課程芸
術文化コース卒業。

高知県文化財団の取り組みを ご紹介します

高知県文化財団

高知県文化財団は、県立美術館、

県立歴史民俗資料館、県立坂本龍

馬記念館、県立文学館、県立埋蔵

文化財センターの管理運営を行っ

ています。

本年三月四日から幕末維新博が

開幕しました。各館においても、

関連する様々な企画展を開催しま

すので、是非ご来館いただければ

と思っています。

また、県立坂本龍馬記念館は、

四月から約一年間休館し、皆さま

にご迷惑をおかけしています。が、

来年の春には、現在の記念館の改

修と新たな館のグランドオープン

を迎えますので、楽しみにしてい

ただけたらと思っています。

アーツカウンシル（文化芸術振興
組織）を充実します

高知県は、平成二十八年度に、

今後十年間で、高知県の文化芸術

はどうあるべきかを示す、「高知

県文化振興ビジョン」を策定し、

「文化芸術の力で心豊かに暮らせ

る高知県」を基本理念に掲げ、そ

の実現のためには、県民一人ひと

りの自由で主体的な文化芸術活動

が活発に行われることが基礎とな

るとしています。

また、ビジョンに掲げた団体や

個人の活動等を支援する様々な施

策を着実に実行していくためには、

これまでの体制を強化し文化芸術

に関する専門性をさらに向上させ

ることが必要とあり、文化芸術団

体等への効果的な支援や、文化芸

術に関わる人材の育成などを推進

するために文化施策に関する高い

専門性を有した文化芸術振興組織

（アーツカウンシル）の充実を図

るとしています。

このビジョンを受けて当財団は、

県からの受託事業として、多くの

人が集まる場で、個人や団体の文

化芸術活動の成果を発表する機会

を多く作っていききたいと思ってい

ます。

具体的には、高知城お城祭りや
豊穰祭などの観光イベントや文化
施設で、個人・団体が文化芸術を
発表する場を提供していきたいと
思っていますので、皆さまのご協
力をお願いします。

また、文化芸術の現場を牽引し
ている方の、さらなる向上を目的
としたアートマネジメント講座を
開催するとともに、個人・団体の
皆さまから文化芸術活動の情報収
集を行いながら、当財団のホーム
ページなどで発信していきたいと
思っています。

高知県芸術祭について

高知県芸術祭は本年度で第六十
七回になります。平成二十九年度
の高知県芸術祭の開催期間は、九
月十九日（火）～十二月十七日（日）
です。この期間内に行われる個
人・団体が行う事業に対して助成
する「KOCCHI ART PRO
JECTS 2017」を募集中
で、申請書の受け付けを六月八
日（木）（当日必着）までとして
います。皆さまからの申請をお待
ちしています。

この高知県芸術祭のオープン

KOCHI ART PROJECTS 2016



Animator in Paradise - あにめのいろは



S U S A K I (art)ASSEMBLE



「お國と五平」上演プロジェクト in 八畝



A から Z (アートゾーン) で考えるワクワク減災力

グイベントとして、昨年度大好評でした、「日露交歓コンサート」を九月十九日(火)に県立県民文化ホール(オレンジホール)で、翌日の二十日(水)には香南市のいちふれあいセンター(サンホール)で開催します。

このコンサートは、ロシアの「チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院」の教授・卒業生など世界で活躍する一流の音楽家の演奏で、一人でも多くの方に真のクラシックを楽しんでいただきたく、

入場無料で開催します。七月中旬に入場者の募集を始めますので、この機会に是非お聴きいただければと思います。

また、高知県芸術祭の共催・協賛行事については、五月中旬から募集します。小説や詩、短歌などの文芸賞についても、六月下旬から作品を募集しますので、当財団のホームページ等をご覧ください。こうした取り組みを行い、県民の方の文化芸術に親しむ機会を増やし、活動を行う県民の励みや創

作意欲の向上を図り、地域の交流人口の拡大や観光振興等に繋げていければと思っていますのでよろしく願います。

公益財団法人 高知県文化財団
高知県高知市高須三五三二
TEL: 〇八八-八六六-八〇二三
FAX: 〇八八-八六六-八〇〇八
<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp>



奏でるピアノで紡ぐきずな in 立川御殿

高知出版学術賞を審査して

佐藤 恵里

本年は十点の応募作品があった。第一次の審査を経て残った五点について委員間で精読し、第二次の審査の結果、委員全員の総意として次の二点を選んだ。特別賞に該当する作品はなかった。なお、受賞作に順位はつけられていない。応募作品の中には、以前刊行した本の題名を変え、内容はほとんど同一という極めてぞんざいなものもあり、委員間で失笑を買ったことを付記する。

田鎖 数馬 著

『谷崎潤一郎と芥川龍之介
「表現」の時代』

(翰林書房刊、A5判、312p)



谷崎潤一郎と芥川龍之介 「表現」の時代

本書は、谷崎（明治十九〜昭和四十年、一八八六〜一九六五）と芥川（明治二十五〜昭和二年、

一八九二〜一九二七）という同時代を生きた作家二人の文学的交流を「表現」をキーワードに質し、それぞれの軌跡を、その言説と作品を時代に泛べることから読み取るうとした労作である。著者は高知大学人文社会科学部准教授。書下ろしの第四章をのぞき、第一章から第七章及び補論まで平成十五年（二〇〇三）から二十四年（二〇一二）までの発表稿になるが、収録に際し「大幅な訂正と加筆・削除」を施したという。

第一章「谷崎と芥川の芸術観―小説の筋」論争の底流―」が総論となるのかもしれない。芥川が主張した「芸術は表現である」に当初谷崎も共鳴したが、詩的「表現」を希求する芥川は筋の面白さに囚われたとみた谷崎を批判し始め、二人の間に「小説の筋」論争が起る。この後、芥川は自殺する。「底流」とは一に時代の語としての「表現」をさす。

第二章は谷崎の『刺青』と『愛すればこそ』の作品論で、以上は芥川が谷崎に投げかけた『刺青』の谷崎氏は詩人だった。が、『愛すればこそ』の谷崎氏は不幸にも詩人には遠いものである。『大いなる友よ、汝は汝の道にかへれ』からによる。第四・五・六章は芥川論で、「詩的表現」を軸に彼の芸術観を探るべく、「奉教人の死」の方法、「芥川文学の変容」、「芥川と「詩的精神」と続く。そして、終章第七章「芥川の死と谷崎」で芥川の死後その「表現」をめぐる言を己の文学の問題として受け止めた谷崎の在り方を論じる。

第一章第三節で「表現」という

語の使用状況をみるに明治期の国語辞書九四六冊と大正期の一六八冊を対象にその定着度を調べ、芥川・谷崎が用いた大正中期には未だ「新しい響き」をもっていたことを確認し、第六節で菊池寛や里見弴も引用している「芸術は表現なり」の「クローツェやスピンガー」の説に直接あたるなど、言説の時代性と事実としての裏付けをとろうとする手堅い実証性が一貫している。たとえば第二章では『刺青』の毒婦に関わる講談本の調査、第七章では芥川の言説の出典を追及して、ポーランドの小説家「シェンキウイチ」の英訳作品の翻訳

など。先行研究の地点を見定めつつ、新知見の提示のために、妥協のない発問と丹念な読み解きの作業が重ねられている。また文章も主観に走らず簡潔である。

総じて、読みやすいものではないが、本書によって、アカデミズムの厳しさとともに、またその成果として、作品を含め、今は古典となった谷崎と芥川の密接な関係におけるヴィヴィッドな時代の息吹を感受することができると。ただ、各節に見出しがあれば、多少とも読む者にリードとなったと思う。

井出 幸男 著

『宮本常一と土佐源氏の真実』

(梟社刊、四六判、352p)



宮本常一と土佐源氏の真実

宮本常一の『忘れられた日本人』は心に沁みる一冊で、なかでも「土佐源氏」は名作である。榊原の橋の下で、元馬喰で八十を超えた盲目の老人の色ざんげで、初めて読んだとき、宮本という稀有な聞き手をもってこの語りが引き出され、文字化され得たのだと感動した。しかし、本作は宮本民俗学の代表作と評価される一方で創作ではないかとの疑義も出され、「文学」と「民俗資料」または「虚構」と「事実」とのあいまいが問題視されてきた。宮自身は一貫して「事実」の記録であり、「民俗誌」「生活誌」であると表明していたという。

本書は、著者が若い頃に入手した「秘密出版物」の『土佐乞食のいろざんげ』の豊かな土俗性と「素朴で圧倒的な性の語り」に魅了され、これが「民俗誌」の「名品」である『土佐源氏』の原作であるに違いないと感得したところから始まる。著者は原作を宮本の手になるものと確信し、厳密な資料批判という学問的立場から、原作と名作との「懸隔の実態」と「宮本の心の真実」について、鮮明な問題設定のもとに資料を読み込み、堅牢な実証性に基づく考証を重

ね、多角的に追求していく。第三章『土佐源氏の実像』（二〇一六年）は書下ろしで、既発表の第一章『土佐源氏の成立』（二〇〇〇年）と第二章『土佐源氏』の欠落（二〇〇五年）、及び資料編2に収める「下元サカエ唄聞書」のもととなった現地調査（一九九七年）を含めると、二十年にわたる探求の成果となる。第三章は第一章の詳説の面もあるが、博搜した新資料を丹念に読み解き、文学を志し、且つ文学が「魔力」だったかもしれない宮本という人間の生と性の軌跡を炙り出す。

そうして達した『土佐源氏』のひとつの結論、「間違いない宮本常一が生み出した「文学」であり、『土佐源氏』の主人公の実像、それはほかならぬ宮本常一その人に通じるもの」には十分な説得力がある。

この粘り強い思考が結実した本書によって、私どもは『土佐源氏』を通じて、宮本という稀代の民俗学者の生身に触れ、また原作と名作の環境としての土佐の民俗の豊穡をあらためて実感することができると。資料編1『土佐乞食のいろざんげ』は厳正なテキスト・クリティクが施され、2とともに貴重であ

る。なお、著者は高知大学名誉教授で、中世歌謡・民俗歌謡を主とする研究者。その知見も本書の基盤となっていることを付け加えた。



さとう えり

一九四八年生まれ。高知女子大学教授を経て、現在高知県立大学特任教授。第二十七回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本演劇・芸能研究。著書に『歌舞伎・俄研究』（新典社）、『図説江戸の「表現」』（浮世絵・文学・芸能）（共著、八木書店）など。

超巨大ブラックホールの 起源に迫る！

泉 拓磨

思っておけば、子供の頃から宇宙に興味がありました。親に買ってもらった図鑑を、飽きもせずに眺めていたと記憶しています。故郷の土佐市では、美しい星空が毎夜見えることも、宇宙への興味を育んだ要因でしょう。我ながら感心するのは、その興味がずっと持ち続けたこと。気づけば大学院では天文学を専攻し、ブラックホールにハマり、ついにはその筋に就職するにまで至りました。継続は力なり。ここでは私の最近の研究について、簡単に紹介させていただきます。

現代天文学の大問題…超巨大ブラックホール形成

今も昔も、「ブラックホール」は多くの人を惹きつける天体ですが、宇宙の古今にわたる天体の進化（歴史）を紐解く天文学者にとっては、その形成過程や、他の天

体現象に及ぼす影響が重要な研究テーマとなります。

近年の天文観測からは、多くの銀河の中心には太陽の百万倍から、なんと十億倍にも至る、超大質量のブラックホールが存在することが示されています。「どうやってそんなに重くなったのか？」と聞きたいところですが、実はこれは天文学者にとって頭の痛い問題です。基本的には宇宙空間に漂うガスを飲みこんで（天文学では「ガス降着」と呼ぶ）巨大化すると考えられていますが、そのガス降着のメカニズムが全くもって不明なのです。ところで、銀河中心部のガス質量のほとんどを担う（すなわちブラックホールを成長させる材料となりやすい）ことから、降着現象の研究で重要な観測対象となるのは、温度マイナスイ千二百程度、低温分子ガスです。大学院で

は低温物質の研究を得意とするグループに所属したことも縁となり、私は「超巨大ブラックホールの成長メカニズム（＝ガス降着メカニズム）の解明」を研究テーマにしたのです。

世界最強の電波望遠鏡、アルマ！

このテーマを追求する上で最も単純かつ堅実な方法は、様々な銀河において、ブラックホールの「ごはん」たる低温ガスを直接観測し、その運動や質量などを測定して様々な理論の予測と比較することです。ところがここで大きな障壁にぶつかります。「ブラックホールに降着するガスは、結局はその周辺（＝百光年程度の大きさの領域。一光年は約九・五兆km）にある」という、当たり前の事実です。銀河は非常に遠くにあり、それ自体の観測も大変なのですが、百光年というのは（地球人にとっては巨大ですが！）銀河に比べると千分の一以下の大きさしかありません。そんな小さな領域の探査は、かつての天文観測技術では極めて困難だったのです。

この状況を激変させたのが、現在南米・チリ共和国のアタカマ砂

漠（標高五千m地点）で運用されている、世界最大の電波望遠鏡・アルマです（図1）。日米欧が中心となり約三十年前に構想が始まった大望遠鏡で、長い建設期を経て二〇一一年から本格稼働し始めました。既存の電波望遠鏡を圧倒する性能を誇り、低温分子ガスの観測が得意。もちろん、銀河中心の小領域もばっちり観測可能。革命的な望遠鏡です。多くの方の助言と幸運のおかげで、私はこのアルマ望遠鏡で取られた最新データを用いて研究生活をスタートできました。



図1：世界最大の電波望遠鏡アルマ

鍵は超新星爆発!?

データの解析はなかなか地味な作業ですが、それを日夜続ける忍耐力も研究者に必須の素養です。そうして手塩にかけて、育てた結果を眺めて、さてどう超巨大ブラックホールは成長過程に新しい知見を与えるか、をウンウン考えるわけです。ところで、「ブラックホールは強大な重力源なのだから、放っておけばガスは勝手に落ちるのでは?」と思われるかもしれませんが、話はそう簡単ではありません。一般に、天体の周りを運動するガスには中心から遠ざかろうとする遠心力がかかるため(公園の回転ジャングルを想像してください)、それが中心天体の重力と釣り合うとガスは安定な軌道に落ち着き、さらに内側へは流れこまないのです。逆に言えば、「超巨大ブラックホールの成長メカニズムを考える」とは、その周辺のガスの安定運動を妨げるメカニズムを考えることと同じ意味です。

この点に関して、私たちはある仮説に注目していました。実は、勢いよく成長しているブラックホールの周囲では、活発に星も生ま

れていることが報告されています。両者の間に何かしらの関係があるように、もっと突っ込んで言えば、星形成活動に起因してブラックホールが成長しているように思えるのです。注目した仮説とは、まさにこの星形成活動で生じる超新星爆発(大質量の星がその一生の最後に迎える大爆発)を利用するものでした。仮説はいたってシンプル。超新星爆発によって、とにかく周囲のガスをめちゃくちゃにかき乱してやるのです。すると、ガスは安定な運動を乱されてしまい、どんどんブラックホールに落ちてくれます。

何事もしっかりと筋道が描ければ話は早いもので、アルマの観測データをあの手この手でいじり、仮説の予言(モデル)と徹底的に比較します。最終結果を見たときの衝撃はよく覚えています。なんと、このモデルを使った計算で、実際に観測されている「超巨大ブラックホールへ落ち込むガスの量」が見事に再現できたのです! 単なる定性的な説明ではなく、きちんと「量」まで観測結果と一致させたのは、世界的にも私たちの研究が初めてです。優れた理論モ

デルと素晴らしい観測データ、そしてそれをつなぐ研究者同士のたゆまぬ努力でなし得た成果でした(図2)。「星々が育む超巨大ブラックホール」——なんとも壮大な様子がついに見え始めました。知的好奇心を刺激される、研究者冥利につきる瞬間でした。

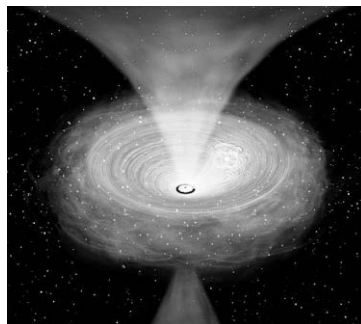


図2: 超新星爆発でブラックホールへのガス降着が促進される様子(想像図)
©東京大学

まだまだ始まったばかり

ところが、これで万事解決というわけではありません。実は私の研究は、少数のブラックホール天体に対してのみ行なった観測に基づいています。主張をより強固に通すには、大量の天体を観測して、同様の結果が得られるということを実証しなければなりません。今後数年間の課題だと思います。別の方向性として、この仮説をはるか彼方のブラックホール天体で検

証することも計画しています。興味深いことに、太陽の十億倍の質量の超巨大ブラックホールは、宇宙開闢からわずか八億年時点で存在することが知られています。単純計算で毎年太陽一個分以上のガスを飲みこんだことになりませんが、非日常なことが多い天文学の世界においてもそれは極めて異常な成長スピードです。超新星爆発を利用したガス降着モデルでも、なかなか説明が難しいレベルです。もしかしたら、私たちがまだ気づいていない別のメカニズムがあるのかもしれない。

私の研究者生活はまだ始まったばかりで、夢は広く果てしないです。まだまだ謎が多い、宇宙の古今にわたる超巨大ブラックホールの成長の完全理解を目指し、これからも研究に励む所存です。

いずみ たくま

国立天文台フェロー(特任助教)
一九八八年、高知県土佐市生まれ。
二〇一六年、東京大学大学院理学系研究科天文学専攻修了(理学博士)。

先達の想いをつなぐ高知市展

―第69回展に寄せて―

下山 郁夫

朝夕の冷たさを感じ乍らも、市展の搬入が近づく春を迎える季節となった。木蓮が咲き、桜が満開となれば市展への作品制作を始めるのが、高校生であった頃の私の日常である。遡ること三十数年前、東京より帰高した時は、市展も厳しい状況にあったようだ。

私は、フランスへの留学が既の所でボツになり、東京での生活にも疲れを感じていた頃だったので、一時的乍ら帰高する事になりました。私学からの誘いもあり、好きな釣りでもと考えての、不純な選択でしかなかったのですが、そのような時、片木太郎先生と大平武夫先生から連絡がありまして、一杯やらないかとのお話でした。

大平先生は、同じ大学の大先輩にあたりますので、無下な断りも

ならず、指定の場所へと参りました。凡の見当はありましたが、片木先生より、おまん：市展を手伝ってくれないか、と切り出された時の事を、思い出します。

当時の高知市展は、お二人の先生が中心となり、運営されていたことも存じておりました。青二才の私に、直接声を掛けることなど、以前では無かったことかと思います。

両先生は、現・市展の内情等詳

しく話され、若手、中堅とも少なく、このままではアンデパンダンの意味する所も消え去り、文化を楽しむ自由も失う、との内容だったと記憶しております。

元々、内紛から生じたこと、今更めくとの思いもあり、ただ黙って酒を呑んでいた自分が妙に小さく、哀れしくも感じた次第です。

当時の市展会場は、郷土文化会館（お城の東側）でした。展覧会の会場としては、申し分ない立地

条件にあり、豊かさを感じていましたが、展示スペースが狭く、話し合いは大切でした。

その後、県立美術館へと会場も替わり、作品も大作が出品されるようになると、県展との棲み分けが浮上、現在の「あなたダビンチはくピカソ」が提案されることとなったのです。

小学生の頃より、物造りの楽しさを、身をもって知ってもらったと、又、その後の文化活動にも携わってもらったことを一番に考えての体験型イベントです。かるぽーとが出来る一年前、最後となる県立美術館屋外での開催が始まりで、その後はかるぽーとに移しての開催となり、今日の市展となっております。

市展会期中の中日に予定されているこのイベントは、年々隆盛となり、当日券を求める児童と父兄の列は長蛇となっております。

ただ一方で、本展の方は、人口減に伴う出品者数の減少があり、今後の掘り起こしが急がれる次第です。



会場ではアンデパンダンの醍醐味が感じられる



《あなたダビンチばくピカン・絵画》 自由な発想で色や形が生まれていく



出品者、一般の来場者、専門委員が作品について意見を交わす「アートディスカッション」。

しもやま いくお
高知市展代表委員長

第69回高知市展
開催期間 二〇一七年五月二十七日(土)
～ 六月十一日(日)
第69回高知市展「子どもアートまつり」
「あなたダビンチばくピカン」
開催日 二〇一七年六月四日(日)
会場 高知市文化プラザかるぼーと
お問い合わせ
高知市文化振興事業団
〇八八-八八三-五〇七一

高知市展は、高知市の文化祭の行事の中でも、その中核を担うものであり、先達の想いが、県民文化としてつながっている土佐の誇りでもあります。

アンデパンダン展の意味するものは、土佐の自由な精神性と多様な文化の融合がもたらす豊かな生活空間だと認識しております。

微力ではありますが、専門委員の旁と、文化を愛する県民の皆さまとで、次世代の土佐の文化を考え乍ら、楽しんでいきたいと思っております。

2～3月の事業から

第6回高知の音楽活性化事業 世界が聴き惚れるハーピスト 福井麻衣コンサート

二月二十三日（木）～二十五日（土）の三日間、大阪出身で高知を訪れるのは初めてというハーピスト福井麻衣さんが、二日間の地域交流プログラム（音楽を身近に感じてもらうとアーティストが各地を訪問し交流する取り組み）と、高知市文化プラザかるぽーと大ホールでのコンサートを行いました。

まず、最初に訪れたのは、病氣の子どもとその家族のための滞在施設、ドナルド・マクドナルド・ハウスこうち。赤ちゃんから高齢者まで幅広い年代の方々が初めて見るグラインドハーブに興味津々。子どもたちには、アイリッシュハーブにも触れてもらい、見て聴いて触って、ハーブの魅力に惹かれていく六十分となりました。

その日の夕方、高知学芸中学高等学校吹奏楽部を訪問。吹奏楽部を対象にしましたが、噂を聞きつけた多くの生徒や先生方が見学に訪れ、当初予定していた人数の倍ほどの人が集まり、ハーブへの関心の高さを物語っていました。演奏だけでなく、コンクールでの心構え等も話し、学生目と耳は、福井さんに集中していました。

翌日訪れた介良潮見台小学校では、五年生を対象に実施。音楽の歴史をたどるように古い曲から新しい曲へと、演奏をじっくり聴かせていきました。この日は、数社のマスコミ取材が入り、子どもたちも少し緊張気味かなと思われましたが、質問コーナーでは、多くの声が上がりました。質問コーナーでは、多くの声が上がりました。

その後、第六小学校の五年生とも交流。終了後は、五年生のみならず給食交流。海外生活が長くほとんど給食を食べたことのない福井さん。食べることが大好きということとで、給食の時間を楽しんでいました。昼食後は、教室で即席サイン会、「お父さんの分も書いてー、お母さんの分も書いてー」と多くの子どもたちが並んでいました。

こうして、多くの人と交流ののち、かるぽーと大ホールでコンサートを開催。今回、本番中に介良潮見台小学校五年生のみならず舞台上がり、福井さんの伴奏で合唱するというサブライズ共演を実施。多くの人に好評をいただきました。リハーサル中は、緊張のあまり貧血で倒れたり、気分が悪くなったりする生徒が続出。一時は、どうなることかと心配しましたが、無事皆大役を果たすことができました。後日、五年生みんなは自主的に福井さんにお手紙を書きました。《共演できたことが一生の宝物になりました》と書いてくれており、本事業の取り組みが、多くの人の心に残っていくことを嬉しく思いました。

（入場者数・七百十五名）



介良潮見台小学校の皆さんと福井麻衣さん（中央）

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Culチャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

第三十三回写真コンテスト・ 高知を撮る

平成二十九年三月二十一日～二十六日、かるぽーと市民ギャラリーにて「第三十三回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品展」を開催しました。

今回は、八十六名の方から二百八十四点の応募があり、審査の結果六十五点を展示しました。

本コンテストは、作品の優劣を競うのではなく、過去から現在に至るまでの県内の出来事や風景、人々の暮らしを写真で記録し、高知の様々な表情を伝えることで未来の高知について考えようという趣旨で行っています。

入選作品展では、たくさんの方に作品をご覧いただいていますので、審査は来場者への配慮も含めて行っています。

今回、このような背景もあって選外となった作品が二点ありました。

ひとつは、事故現場を写した記録性の高い作品です。この事故では、亡くなった方がおりご家族など関係者の方が会場で作品をご覧になった場合を考慮しました。

もうひとつは、靴を履いて着衣のまま川へ飛び込むところを写した作品です。

タイミングを狙ったようですが撮れたであろう作品だったので、撮影場所の川は、水難事故が起こりやすく、命を落とした方

も多くいるため、着衣のまま飛び込むことへの注意喚起という面から選外となりました。

表彰式での審査講評にもあった通り、出品される方にも作品の記録性や高知らしさ以外に入選作品展の来場者への配慮という点も審査において重要視していることをご理解いただき、より多くの方に親しまれるコンテストとして長く続けていきたいと思っています。

〈入場者数 六百五十名〉



講評会の様子

高知市文化振興事業団 出版物のご案内

「国際化」時代の山村・農林業問題

―西郷への関心・高知県からの報告―

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文薫・依光良三
川田勲・飯国芳明 著

「国際化」時代の山村・農林業問題 再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会 鈴木文薫・依光良三・川田勲・飯国芳明 著
―森林・緑を守り育てる担い手たる、山村再生への模索

危機的状況のなかで山村はどう生きていけばいいか。

その再生への途を、高知県下8町村の実態分析等から展望する。(平成七年刊)

価格 2,097 円 (本体価格 1,942 円 + 消費税)

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち

高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071 へ



高知を撮る

第33回写真コンテスト入賞作品

おさばい様

(平成28年6月 土佐町宮古野)

横山 正富

ここ宮古野では田植えが終わった後、畦に豊作を願って神様（オサバイ様）を祭ります。虫送りの祭りの前後のようです。

読書には二種類あるのではない
かと思う。「エンタメ読書」と「メ
ランコ読書」である。

「エンタメ読書」というのは、「エ
ンターテインメントに楽しみ」の
ための読書。ハラハラ、ワクワク
させてくれる物語に読みふけて
時を忘れるような読書である。

小学校時代、私はキプリングの
『ジャングル・ブック』を
読んで、その面白さに夢中になっ
た。以来、動物の出てくる物語にハマッ
た。『シートン動物
記』（少年版）を全
巻読破し、その延長
で『ファール昆虫
記』まで読むようにな
った。

ところがここで
皮肉なことが起こっ
た。昆虫採集に熱中
し始めたのである。その結果、読
書の習慣をなくしてしまった。虫
を追って野や山を駆け回る方が楽
しくなった。「エンタメ読書」には、
こういう「脆さ」がある。

一方「メランコ読書」は、悩み
があるときに解決を求めてひたる
読書だ。

もちろん、「悩み」にも深淺が

エンタメ読書と メランコ読書



風俗歳時記

ある。「タバコをやめるにはどう
すればよいか？」というのも悩み
である。「自分はこの世に存在す
る価値があるのだろうか？」と煩
悶するのも、悩んだ。

前者の悩みから、私は『5日
でタバコをきっぱりやめる本』（林
高春）を読み、禁煙に成功した。
後者の悩みからは、ドストエフス
キーの『罪と罰』

を読みふけり、主
人公ラスコーリ
ニコフの苦悩に共感
した。どちらも
自分と本との間に
「メランコリー」、
つまり「愁い」悩
み」が介在する。
これが「メランコ
読書」だ。

こういう読書の
味を知ると、簡
単には本を捨てら
れなくなる。「悩んだら本に悶え」
が信条となり、読書は身体の一部
になる。

その上で最近思うのは、「エン
タメ読書」と「メランコ読書」は、
車の両輪だということだ。互いに
共鳴し合いながら、「美味しい読
書の世界」を作り出すのである。

（本の虫）

高知市立中央公民館事業 第48回高知市民頭脳スポーツ大会



「頭脳スポーツ」とは、国籍、男女、年齢に区別なく楽しめる「頭でするスポーツ」です。市民相互の親睦と競技技術向上を目的として昭和45年から毎年6月に行われています。48回目となる今年は囲碁・将棋・連珠(五目ならべ)・チェス・オセロの計5種目で開催。

【日 時】 2017年6月18日(日) 9:00受付開始 9:30競技開始
【会 場】 高知市文化プラザかるぽーと内中央公民館 9階・11階
【参加料】 300円(18歳以下は200円)

お問い合わせ: 高知市文化振興事業団 088-883-5071



高知市立中央公民館事業 第182回市民映画会



著名な天文学者エドと彼の教え子エイミーは、皆には秘密の恋を謳歌していた。

しかし、そんなエイミーの元に突然届いたエドの計報。現実を受け入れられないエイミーだが、彼女の元にはその後もエドからの優しさやユーモアにあふれた手紙やメールや贈り物が届き続ける。

エドの遺した謎を解き明かそうと、エイミーは彼が暮らしていたエディンバラや、かつて二人で時間を過ごしたイタリア湖水地方のサン・ジュリオ島などを巡りはじめ、そこで彼女が誰にも言えずに封印していた過去を、エドが密かに調べていたことを知るが――。

その《謎》を解き明かしたとき、極上のミステリーは切ない愛の物語に生まれ変わる。

■日時
2017年6月23日(金)・24日(土) 11:00～

■上映作品(2作同時上映)
「ある天文学者の恋文」
「92歳のパリエージュ」

■会場
高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

■料金
一般 前売り 1,300円(当日 1,500円)
割引 1,000円(学生証・長寿手帳・障害者手帳などをお持ちの方)

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

身体改造計画

まず成果が見えるようにグラフ化する。筋トレは二日に一日とか休息日を設けるというが、モチベーションの低い人間にとってはその一日の休息が二日になり三日になって結局続かないで、毎日欠かさないとという目標をたてた。休息したければ回数を減らせばいい。道具を使わないトレーニングを三種類することにした。まず腕立て伏せ。

ふつうに生活していると、身体がみるみる衰えていくのを七十代になって身に染みて感じている。筋トレなどをせず、日々生活に追われていると、気力も好奇心さえも萎えてくる。七十代になると極めて顕著になるということだろう。私はいつも気付くのが遅いのだが、で、一念発起、トレーニングを始め一カ月が経った。

腕だけでなく背中もお腹も足も使う。全身がたくましくなると思ったが、美しい腕立て伏せは難しい。最初は一回やるのもやっとなのであったし、すぐに脇が甘くなってしまうが、なんとか二十回ぐらいいは続けられるようになった。次にスクワットである。続ければなんとかなるもので三十回は軽くできるようになった。最後にお腹を引き締めるための交互足あげ。水平にした手に屈くように足を上げる。これもワンクル片足三十回は続く。が、欲が出て身体のだるさを加えると、十五回ぐらいい切れてくる。

一カ月が経過して、連れ合いの言うには「ウエストのくびれができています」とのことだった。うーん！なかなか結果が出始めているではないか、と油断した途端、花見酒を飲みすぎて転んで怪我をした。一週間のプランクができてしまった。仕事を続けるためにも遊ぶためにも、ささやかな筋トレは続けていこうと思っている。

(森)

今号の表紙

「ホタテ」

小村 夏生

私が唯一食べることができる貝類「ホタテ」を描きました。
一番好きな調理方法はバター炒めです。
おいしいですね。
考えていたらお腹が空いてきました。

(こむら なつき/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



第69回

高知市展



アンデパンダン

2017.5.27[土] ▶ 6.11[日] 午前9時 ▶ 午後6時 [月曜休館]
初日 ▶ 午前10時開場 / 最終日 ▶ 午後5時終了
高知市文化プラザかるぽーと [7階市民ギャラリー]

絵画 [洋画] 日本画 書道 先端美術 [立体] 彫刻 陶芸 工芸 写真 ペン字 デザイン 北見市美術交流作品

入場料 ▶ 前売300円 / 当日400円

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者とその介護者1名、及び長寿手帳所持者と高校生以下は無料

前売券販売所 ▶ かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
高新プレイガイド 088-825-4335 ほかに

[作品搬入]

日時 ▶ 5月21日 [日]・22日 [月] 午前9時 - 午後5時

会場 ▶ 高知市文化プラザかるぽーと [7階市民ギャラリー]

出品料 ▶ 1部門につき一般1,500円 / 学生1,000円

お問い合わせ 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

主催：高知市展代表委員会 / 公益財団法人高知市文化振興事業団 / 高知市教育委員会 共催：高知新聞社 / NHK 高知放送局 / RKC 高知放送 / KUTV テレビ高知 / KSS さんさんテレビ



会期中、本チラシをご持参の方は前売料金 [300円] でご入場できます